福井県埋蔵文化財調査報告　第164集

上 蔵 垣 内 遺 跡

― 県営かんがい排水事業　東江地区に伴う調査 ―

２０１７

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序　　文

本書は、県営かんがい排水事業東江地区に伴い、平成25年度に実施した上蔵垣内遺跡発掘調査の成果をまとめた報告書です。

上蔵垣内遺跡は坂井市坂井町蔵垣内・五本・上関にかけて広がる水田地帯に立地する遺跡で、過去には平成21・22年度にも発掘調査を実施しています。

今回の調査で検出した遺構は自然河川や溝が主で、溝は基本的に自然河川につながる用排水路であったと考えられます。出土した遺物には縄文時代晩期、弥生時代中・後期、古代、中世、近世の各時代の土器や陶磁器などがあります。

今後、本書の調査成果が広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解と、郷土の歴史に対する興味をより一層深める端緒となれば、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関や地元の方々をはじめとする多くの皆様方から、あたたかいご支援とご協力を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

平成29年３月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長　工　藤　俊　樹

例　　言

1　本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、県営かんがい排水事業東江地区に伴い、平成25年度に実施した上蔵垣内遺跡（福井県坂井市坂井町五本・上関所在）の発掘調査報告書である。

2　上蔵垣内遺跡の調査は坂井農林総合事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、中森敏晴、野路昌嗣、宮崎認、木村茉莉、秋山綾子が担当した。

3　発掘調査は、平成25年11月１日から同年12月27日まで実施した。出土遺物の整理作業は、平成27年４月１日から平成29年３月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。

4　本書の編集は中森があたり、赤澤徳明、山本孝一と分担して執筆した。文責は以下のとおりである。
中森　第１章～第３章第２節、第３章第３節４・５、第４章　　山本　第３章第３節１・２
赤澤　第３章第３節３

5　上蔵垣内遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。

6　挿図および表の作成は各執筆者がおこない、遺構挿図作成を鈴間智子が、遺物挿図作成を吉田桂子がそれぞれ補佐した。写真については１・３区遺構を宮崎が、それ以外を中森が撮影し、写真図版は中森が作成した。

7　本書に掲載した調査区測量図は、株式会社サンワコンに委託して作成した。

8　包丁の保存処理および木製柄部の樹種同定は、平成27年度に株式会社文化財サービスに委託し、実施した。その結果報告の一部を中森が加筆・編集し、第３章第３節５（金属製品の項）として掲載した。

9　写真図版・挿図・表などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。

10　本書における水平レベルの表示は海抜高（m）を示し、方位は座標北を用いた。X・Y座標値は国土方眼座標系第Ⅵ系（世界測地系）に基づく。

11　１・３・４図の作成にあたり、国土地理院５万分１地形図「福井」（平成16年５月１日発行）・「三国」（平成３年３月１日発行）、同２万５千分１地形図「三国」（平成21年３月１日発行）、同２万５千分１土地条件図「福井」（平成16年５月１日発行）を一部改変して使用した。

12　本書で用いた遺構の略記号は以下のとおりである。
自然河川：ＳＲ、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、ピット：ＳＰ

13　遺構の土層色調は、小山正忠・竹原秀雄 編『新版 標準土色帖』に拠る。

14　本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。

15　発掘調査に際しては、下記の機関から協力を得た（敬称略）。
十郷用水土地改良事務所

16　発掘調査には地元の方々の参加・協力を得た。また、遺物整理作業は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理作業員があたった。

目　　次

第１章　調査の経緯 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 3
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　遺構と遺物 …… 7
第１節　遺跡の概要 …… 7
第２節　遺構 …… 7
第３節　遺物 …… 16

第４章　まとめ …… 22

写真図版目次

図版第１　遺構　（１）１区南半部全景（南より）　（２）１区北半部全景（南より）
（３）２区12・13グリッド全景（北より）　（４）２区14～19グリッド全景（北より）
図版第２　遺構　（１）２区20～27グリッド全景（北より）　（２）２区28～35グリッド全景（北より）
（３）３区全景（北より）
図版第３　遺物（土器）　土師器・須恵器・土師質皿・陶器・磁器
図版第４　遺物（土器・石器・金属製品）　(1)縄文土器・弥生土器　（２）石鏃　（３）包丁

挿 図 目 次

第１図　上蔵垣内遺跡調査区位置図 …… 1
第２図　グリッド配置図 …… 2
第３図　上蔵垣内遺跡周辺地形図 …… 3
第４図　上蔵垣内遺跡と周辺の遺跡分布図 …… 5
第５図　調査１・２区全体図 …… 9・10
第６図　１区 遺構実測図 …… 11
第７図　２区 12～23グリッド遺構実測図 …… 12
第８図　２区 24～35グリッド遺構実測図 …… 13
第９図　２区 ＳＤ６・10・12・15・16・18・19・22実測図 …… 14
第10図　２区 ＳＫ２～８、ＳＰ１・３実測図 …… 15
第11図　縄文土器・弥生土器実測図 …… 17
第12図　土師器・須恵器実測図 …… 19
第13図　土師質皿・陶器・磁器実測図 …… 20
第14図　石鏃・包丁実測図 …… 21

表 目 次

第１表　１区自然河川・溝一覧表 …… 8
第２表　２区自然河川一覧表 …… 8
第３表　２区溝一覧表 …… 8
第４表　２区主要土坑・ピット一覧表 …… 8
第５表　縄文土器・弥生土器出土地点一覧表 …… 18
第６表　土師器・須恵器・土師質皿・陶器・磁器一覧表 …… 20

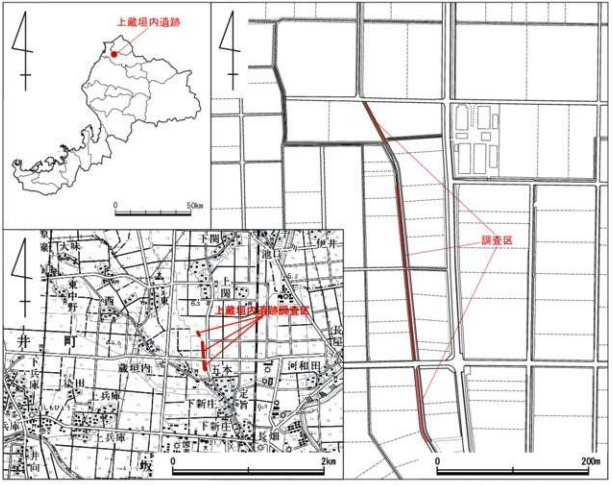
第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯（第１図）

福井県の最北部に展開する坂井平野は広大な水田や畑作地を抱える県内有数の農業地帯で、その坂井平野一円を潤し、農産の根幹を支える重要なかんがい幹線水路が十郷用水である。しかし、近年では施設老朽化による維持管理負担の増大、人口増加・都市化に伴う水質悪化、慢性的な用水不足など、様々な問題が噴出してきた。それらの課題を解消するため、用水路をパイプライン化して、配水管理の合理化を図り、用水の再編と安定供給を目指すかんがい排水事業が目下推進されている。

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）は坂井農林総合事務所の依頼を受け、あわら・坂井両市にかかる東江地区を対象とするかんがい排水事業の実施によって影響を受けるおそれのある複数の遺跡について、試掘調査を随時実施した。このうち、坂井市坂井町蔵垣内・五本・上関にかけて展開する上蔵垣内遺跡について、平成22・23年（2010・2011）に依頼（平成22年９月６日付け坂農総第3170号、同23年９月20日付け坂農総第4068号）を受けて試掘調査を実施した結果、弥生・平安時代に属する遺物を検出し、五本・上関地籍の総面積1,330㎡について本格調査が必要となる旨を回答した（平成22年12月10日付け埋文第12－34号、同23年11月１日付け埋文第３－36号）。

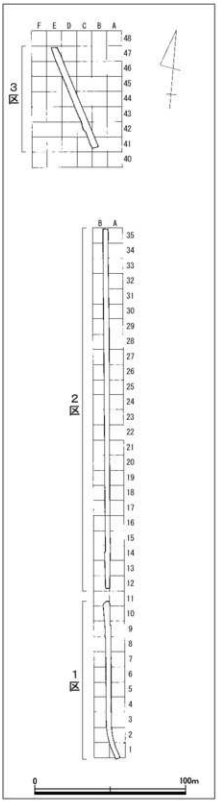
この回答を受けて、坂井農林総合事務所は福井県教育庁生涯学習・文化財課に本格調査を依頼、県埋文も交えた協議の結果、平成25年度に調査対応することで合意し、調査計画が確定した。



第１図　上蔵垣内遺跡調査区位置図（左上：縮尺1/2,500,000、左下：縮尺1/50,000、右：縮尺1/5,000）

第２節　調査の経過（第２図）

調査区の調査前の状況は市道・農道および用水路で、南から市道部、農道部、用水路部に三分されることから、市道部を１区、農道部を２区、用水路部を３区とした。調査区の形状はパイプラインの延長線上の一部であるため、その線形のままに長方形を呈し、規模は南北総延長390m、東西幅３～５m、総面積1,330㎡（１区：100m×３m＝300㎡、２区：210m×３m＝630㎡、３区：80m×５m＝400㎡）を測る。



第２図　グリッド配置図（縮尺1/2,500）

調査区には一辺10mの方形グリッドを設定し、東から西方向にA～F、南から北方向に１～48の記号を付し、各グリッド名とした（第２図）。

現地調査は平成25年（2013）11月１日より開始した。期間が２ヶ月と短い上に折悪く荒天が続いたため、進捗は難渋を極めたが、同年12月27日に調査を終了した。また、１区と２区の間の市道部分（10m×2.78m＝27.8㎡）は、平成26年（2014）１月21日に工事立会で対応したが、遺構・遺物とも検出しなかった（平成26年１月20日付け坂農総第211号で依頼、同年２月３日付け埋文第11号で回答）。

以下、主に２区調査日誌を抄録する。

11月13日　現場作業開始、コンベア等器材を設置。

11月14日　排水溝を掘削後、遺構精査開始。

11月18日　12・13グリッドで自然流路（ＳＲ１）検出。

～この頃より年末まで悪天候が続き、進捗が滞る～

11月25日　12グリッドでＳＲ１両岸を検出。

11月27日　12・13グリッド完掘、写真撮影。

12月３日　12～19グリッド以南完掘、全景写真撮影。

12月５日　20グリッド以北の状況を確認するため、グリッドごとに東西方向トレンチを設定・掘削。

12月９日　25グリッド以北、遺構精査・掘削。黄褐色地山に黒色覆土の遺構で25グリッド以南とは様相が異なる。

12月11日　１区調査終了。

12月16日　20～26グリッド遺構掘削。

12月17日　２区完掘。

12月18日　２・３区全景写真撮影、のち空中撮影。

12月19日　道具洗浄、後片付け。

12月24日　発掘道具等、公用車で分室へ運搬、プレハブ等を撤除。

12月26日　器材・ユニットハウス等撤収開始。

12月27日　器材・ユニットハウス等撤収完了、現地調査を終了する。

第２章　遺跡の地理的・歴史的環境

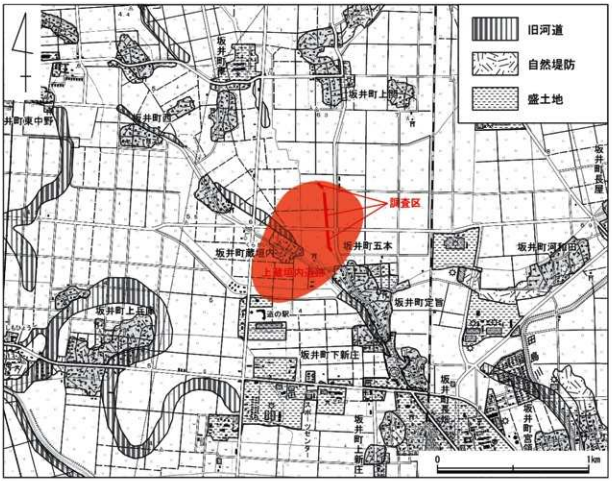
第１節　地理的環境（第３図）

福井県は古代の越前・若狭両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がる付近に位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は越前国から現在の敦賀市を除いた範囲にほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国に現在の敦賀市を合わせた範囲に相当する。

福井平野は嶺北地方に展開する福井県最大の平野であるが、県下では一般に福井市南部の文殊山以南を武生盆地、福井市北部を西流する九頭竜川以北を坂井平野、両者の中間部を福井平野と各々細別しており、上蔵垣内遺跡の所在する坂井市は市域の大半が坂井平野に属する。

坂井平野は九頭竜川やその支流の竹田川・兵庫川などによって形成された、低平・低湿な沖積平野である。かつては氾濫土砂の堆積や流入による自然堤防地形や、「クロ」と呼ばれる島状の微高地が多数存在したとされるが、近年の大規模開発事業でその多くは削平され、往時の地景は失われて久しい。

上蔵垣内遺跡は竹田川の支流である田島川と兵庫川に挟まれた平野部の中央に位置し、遺跡範囲およびその周辺には蔵垣内・五本・上関の各集落が立地する自然堤防や盛土地のほか、旧河道の埋立地なども認められる。旧河道跡から推測して、田島川・兵庫川の旧支流が現在の五本集落方面から遺跡範囲を南東－北西方向へ放射状に貫流していたものと推測される（第３図）。



第３図　上蔵垣内遺跡周辺地形図（縮尺1/25,000）

第２節　歴史的環境（第４図）

本節では上蔵垣内遺跡およびその周辺城の主要な遺跡のうち、特に近年の主要調査成果を記す。

上蔵垣内遺跡（第４図１）　坂井市坂井町蔵垣内・五本・上関に所在する。平成21・22・25年（2009・2010・2013）に県埋文が発掘調査を実施した。平成21・22年の調査では弥生時代・古代の溝や中・近世の井戸を多数検出しており、特に古代の溝は十郷用水に関連するものと考えられる。

金津新江ノ尻遺跡・下関遺跡（第４図６・22）　金津新江ノ尻遺跡はあわら市新用に、下関遺跡は坂井市坂井町下関に所在する[1]。平成24年（2012）に県埋文が発掘調査を実施し、主な遺構として溝６条、井戸１基、土坑10基、ピット約50基を検出した。出土遺物は弥生時代中期の土器が大半で、石器や玉作り関連遺物も少量含む。弥生時代中期の集落跡と推測される。

南稲越遺跡（第４図９）　あわら市稲越・伊井に所在する。平成５年（1993）に旧金津町教育委員会（以下、旧金津町教委）が、同16・17年（2004・2005）にあわら市教育委員会が、同27・28年（2015・2016）に県埋文が発掘調査を実施した。主要な成果として、平成16・17年の調査では弥生時代終末期から古代にかけての遺構・遺物を検出した。

伊井遺跡（第４図10）　あわら市伊井に所在する。平成２・４年（1990・1992）に旧金津町教委が発掘調査を実施した。弥生時代後期から古墳時代中期を中心とした複合遺跡で、玉作り工房と見られる平地住居や多数の玉作り関連遺物を検出した。

大味上遺跡（第４図13）　坂井市坂井町大味に所在する。平成８・９・22年（1996・1997・2010）に県埋文が発掘調査を実施した[2]。平成８年の調査では主に縄文時代～中世の遺構・遺物を検出した。

大味中遺跡（第４図14）　坂井市坂井町大味に所在する。昭和６年（1931）の耕地整理の際に独鈷石と弥生式土器３点が出土したと伝えられる。平成８・22年（1996・2010）に県埋文が、同９年（1997）に旧坂井町教育委員会（以下、旧坂井町教委）が発掘調査を実施した[3]。平成８年の調査では主に中世（13～16世紀）の遺構・遺物を検出した。

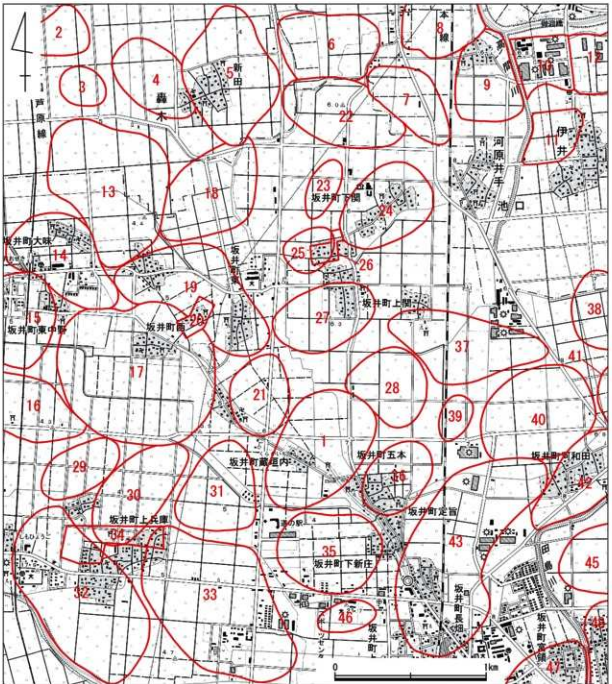
下兵庫北遺跡（第４図16）　坂井市坂井町下兵庫に所在する。平成８～12年（1996～2000）に県埋文が発掘調査を実施し、縄文時代中期、弥生時代後期後半～終末、古代の遺構・遺物を検出した[4]。

大関西遺跡（第４図17）　坂井市坂井町西に所在する。平成10年（1998）に県埋文が、同10～12年（1998～2000）には旧坂井町教委が発掘調査を実施した[5]。旧坂井町教委の調査では、縄文時代後期の配石遺構や建物跡と見られる環状柱列を検出したほか、素掘り井戸より多量の弥生時代終末期の土器や木製衣笠などが出土している。

大関東遺跡（第４図19）　坂井市坂井町東・蔵垣内に所在する。平成８・20・21年（1996・2008・2009）に県埋文が、同10年に旧坂井町教委が発掘調査を実施した[6]。平成20・21年の調査では、平安時代の遺構・遺物を多く検出している。

関中遺跡（第４図24）　坂井市坂井町下関に所在する。平成24年に県埋文が発掘調査を実施した。溝11条、井戸10基、土坑５基、ピット約70基を検出し、土師質皿や越前焼・青磁・瀬戸美濃焼、漆器椀・皿などの中世遺物が主に出土した。15世紀後半から16世紀前半を中心とした中世集落で、時期不詳だが本遺跡南西に隣接する下関館跡（第４図26）にも関連する集落と推測される。

長屋遺跡（第４図41）　坂井市坂井町長屋に所在する。遺跡の発見は古く、大正６年（1917）には学会に報告されている。昭和60～62年（1985～1987）に県埋文が発掘調査を実施し、弥生時代終末期の方形周溝墓２基や土壙墓をはじめ、６～７世紀代の竪穴住居８棟などを検出した。



No.	県番号	遺跡名										
1	11040	上蔵垣内遺跡	13	11023	大味上遺跡	25	11036	館遺跡	37	11049	島田遺跡
2	09117	中番江ノ口遺跡	14	11024	大味中遺跡	26	11037	下関館跡	38	11050	長屋平田遺跡
3	09118	中番中元遺跡	15	11026	東中野遺跡	27	11038	上関遺跡	39	11051	五本為信遺跡
4	09124	森本遺跡	16	11027	下兵庫北遺跡	28	11039	上関高田遺跡	40	11052	河和田北遺跡
5	09125	新田遺跡	17	11028	大関西遺跡	29	11041	染田遺跡	41	11053	長屋遺跡
6	10073	金津新江ノ尻遺跡	18	11029	東寺田遺跡	30	11042	上兵庫鎌田遺跡	42	11054	河和田遺跡
7	10074	河原井手遺跡	19	11030	大関東遺跡	31	11043	上兵庫巻地遺跡	43	11055	長畑・定旨遺跡
8	10076	稲郷遺跡	20	11031	大口城館	32	11044	上兵庫西遺跡	44	11056	御前田遺跡
9	10077	南稲郷遺跡	21	11032	下蔵垣内遺跡	33	11045	上兵庫東遺跡	45	11039	河和田向田遺跡
10	10085	伊井遺跡	22	11033	下関遺跡	34	11046	上兵庫館跡	46	11060	上新庄五十石遺跡
11	10086	伊井植木遺跡	23	11034	下関蔵町遺跡	35	11047	下新庄遺跡	47	11067	宮領遺跡
12	10087	清間遺跡	24	11035	関中遺跡	36	11048	五本遺跡	48	11069	田島遺跡

第４図　上蔵垣内遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）

河和田遺跡（かわだいせき）（第４図42）　坂井市坂井町河和田に所在する。明治時代末期の土地改良時に発見され、当時の学会でも注目を浴びた。その後、昭和39年（1964）に國學院大學が学術調査を実施し、古墳時代初頭の玉作り工房とみられる竪穴住居を検出した。また、昭和57年（1982）には、かねてより本遺跡の学術調査を継続していた明治大学考古学研究室が旧坂井町教委の委託を受けて発掘調査を実施し、弥生時代後期後半の遺構や玉作り関連遺物を検出した。

宮領遺跡（みやりょういせき）（第４図47）　坂井市坂井町宮領に所在する。昭和27年（1952）ごろの田島川排水復旧工事の際、右岸地域の畑地から須恵器の坏や坏蓋が約10個出土したと伝えられる。昭和41年（1966）、畑の土取作業中に遺物が出土したため、旧坂井町教委が発掘調査を実施した。古墳時代の炉跡を検出したほか、土師器や須恵器、鉄鏃などの遺物も出土した。

註

1　隣接する２つの遺跡名を併記するのは、平成24年度調査区が両遺跡の範囲に跨り、遺跡の内容から一連の集落と判断するためである（田中 2016）。
2　平成８年の調査は大味地区遺跡群（本多編1999）の本調査区と、立会２－１～９区、同３－１～４区、同５区が相当する。
3　平成８年の調査は、大味地区遺跡群の立会３－７・８区、同４区が相当する。
4　坂井兵庫遺跡群（中川編2004・2005）の下兵庫Ａ～Ｃ・Ｆ～Ｊ・Ｌ地区が相当する。
5　旧坂井町教委の調査は、坂井大関西鯉地区遺跡群（齊藤編2005）の４～10区が相当する。
6　平成８年の調査は大味地区遺跡群の立会１区が、平成10年の調査は坂井大関西鯉地区遺跡群の１～３区が相当する。

参考文献

青木隆佳 編『大関東遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第133集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2012年
青木隆佳 編『大関東遺跡・上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第139集 同 2013年
青木隆佳 編『大味上遺跡・大味中遺跡・下番荒谷遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第157集 同 2015年
青木隆佳・仁科章『第二章 黎明期の坂井町』『新修 坂井町誌 通史編』坂井市 2007年
市瀬由自「第２章　福井平野の地形と洪水」『水害地域に関する調査第７部　九頭竜川流域の水害地形と土地利用』科学技術庁資源調査所資料第３号 科学技術庁資源調査所 1968年
上田三平『越前及若狭地方の史蹟』歴史図書社 1974年（1933年の復刻）
小葉田淳 監修『福井県の地名』日本歴史地名体系 第18巻 平凡社 1981年
河原純之・島田正彦・牟田嘉彦・松浦義則 責任編集『角川日本地名大辞典 18 福井県』角川書店 1989年
株式会社イビソク 編『南稲越遺跡』あわら市埋蔵文化財報告第１集 あわら市教育委員会 2007年
齊藤裕二「大味中遺跡」『第13回発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1998年
齊藤裕二 編『坂井大関西鯉地区遺跡群』坂井町埋蔵文化財調査報告 坂井町教育委員会 2005年
齋藤則次兵衛『福井県坂井郡坂井町宮領東部遺跡調査報告』同 1966年
佐藤俊朗『第６章　九頭竜川下流坂井平野の自然条件と用排水機構』『水害地域に関する調査第７部　九頭竜川流域の水害地形と土地利用』科学技術庁資源調査所資料第３号 科学技術庁資源調査所 1968年
鈴木篤美「南稲越遺跡」『第31回 福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2016年
田中勝之『関中遺跡 下関遺跡 金津新江ノ尻遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第161集 同 2016年
寺村光晴「第三章 二 2 越前国河和田遺跡」『古代玉作の研究』吉川弘文館 1966年
中川佳三 編『大関東遺跡・大味上遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第44集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999年
中川佳三 編『坂井兵庫遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第73・81・82集 同 2004・2005年
中森敏晴「上蔵垣内遺跡」『年報29』同 2015年
仁科章『長屋遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第13集 同 1987年
仁科章「第八章 坂井町の考古資料」『新修 坂井町誌 通史編』坂井市 2007年
野路昌嗣 編『上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第151集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2014年
橋本幸久「第１章８ 南稲越遺跡」『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度』金津町教育委員会 1995年
橋本幸久・鈴木篤美「第１章２ 伊井遺跡」『金津町埋蔵文化財調査概要 平成元年～五年度』同 1995年
廣嶋一良「52 長屋遺跡」・「53 河和田遺跡」『福井県史 資料編13 考古』福井県 1986年
福井県教育委員会『福井県遺跡地図』1993年
本多達哉 編『大味地区遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第43集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999年
明治大学考古学研究室 編『福井県坂井郡坂井町 河和田遺跡発掘調査概報』坂井町教育委員会 1983年
山本孝一 編『大関西遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第53集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2001年

第３章　遺構と遺物

第１節　遺跡の概要（第５図）

１　地形と層序

上蔵垣内遺跡は田島川および兵庫川流域の低平・低湿な沖積平野上に展開し、縄文・弥生・古代・中世・近世の各時代遺跡として周知される。今回の調査区は蔵垣内集落の東方および五本集落の北方、上関集落の南方に広がる水田地帯に位置し、遺跡範囲の北半部を南北に縦断する形となる。

今回の調査区では水田耕作土・盛土や人工構造物の直下で地山層（基盤層）が露出し、近年の大規模開発の影響ですべての遺物包含層が削平されたものと推測する。標準層序は以下のとおりである。

Ⅰ層：表土層。水田耕作土や道路部の盛土など、主に開発に伴う造成土で構成される。

Ⅱ層：地山層。黄褐色粘質土で構成される。

遺構検出面の標高は１区が5.10～5.30m、２区が5.00～5.30m、３区が4.70～4.90mをそれぞれ測り、ほぼ平坦と言える。これは主に開発による削平の影響が大きく、遺跡およびその周辺地の平野部では、かつて発達した自然堤防や後背湿地などの自然地形はその痕跡すらほとんど見出せない。

２　遺構検出状況

１・２区では近世以降の攪乱や開発による削平の影響が大きいものの、おおむね良好な遺存状態を保っていたが、３区では削平が地山層以下まで深く及んでおり、遺構・遺物とも全く検出し得なかった。以下、３区に関しては本項の記述を報告のすべてとし、１・２区の調査成果のみ記述する。

検出遺構は自然河川、溝、土坑、ピットで、土坑・ピットは遺物を得たもののみ遺構番号を付した（第５図）。その内訳は１区が自然河川１条と溝１条、２区が自然河川２条、溝22条、土坑10基、ピット３基をそれぞれ数える。１・２区とも自然河川や溝が主体を占めるが、２区中央を東西に横断する自然河川（ＳＲ２）を境として遺構の様相が大きく異なり、特にＳＲ２以北に遺構の大半が集中する。

３　遺物出土状況

出土遺物量は大型コンテナで３箱を数える。内訳は１区が２箱、２区が１箱で、全体に遺物量が非常に少なく、特に２区は調査面積に比して極端に少ない。内容は縄文土器、弥生土器、土師器・須恵器、土師質皿、中・近世陶磁器類のほか、わずかながら石器や金属製品も得た。土器類はすべて破片で、接合資料も数点程度にとどまる。磨滅の顕著なものが多く、いわゆる流れ込みである可能性が高い。

第２節　遺構（図版第１・２、第６～10図、第１～４表）

本節では主要遺構について概略を記述する。個別の詳細は各遺構一覧表（第１～４表）を、出土遺物は本章第３節をそれぞれ参照されたい。なお、本節で提示する各遺構の規模（長さ・幅・深さ）や方位（角度）などの数値は、すべて遺構検出面を基準として測量図上で算定した概数値である。

１　１区

１）自然河川・溝（第６図、第１表）

各１条を検出した。ＳＲ１は調査区北端より南方へ延伸する自然河川で、南端部で西岸肩部を検出したが、東岸は確認できず、調査区外に拡張するものと推測する。ＳＤ１はＳＲ１のさらに南方から調査区南端まで連続する溝で、南端付近で３条に分流する。

２　２区

１）自然河川（第７・８図、第２表）

２条を検出した。ＳＲ１は岸線の片側のみの検出で、A22グリッドより西岸部が出て、南方に延伸し、B15グリッドで一旦調査区外に消え、A13グリッドより今度は東岸部が調査区南端まで達する。近・現代の掘乱を受けており、１区で検出したＳＲ１につながる自然河川と推測する。

ＳＲ２はＡ・B24～25グリッドにかけて両岸部を検出し、調査区を東西方向に横断する。これを境に南北で遺構の様相が大きく変容していることから、遺跡域内で境界となっていた自然河川と推測する。遺物はほとんど出土していない。

２）溝（第７～９図、第３表）

22条を検出した。おおよその延伸方向別に南北方向（ＳＤ１～５・７～９・14～16・19・21）と東西方向（ＳＤ６・10～13・17・18・20・22）に大別できる。南北方向の溝が若干多いが、東西方向の溝はすべてＳＲ２以北に集中している。遺物は主にＳＤ２で須恵器５点と土師器１点が集中して出土した（第12図２・３・７・８・14・19）ほか、ＳＤ12で緑色凝灰岩の原石１点が出土した。

３）土坑・ピット（第10図、第４表）

土坑10基とピット３基を検出した。ここでは主要なもののみ図示する。掘立柱建物などの建築物は抽出し得なかった。遺物はＳＫ６出土資料（第11図５）とＳＫ10出土資料（第11図３）のほかは、ほとんど図示に堪えない磨滅した土器の細片が主である。

第１表　１区自然河川・溝一覧表

遺構No.	地区	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	底面の標高(m)	底面の傾斜	出土遺物	備考	掲図番号
SR1	A・B6～9	27.20	2.86以上	0.10～0.20	N-S	5.03～5.16	南方へ緩やかに下降	古墳時代、須恵器	近世以降の自然河川跡	第6図
SR1	A・B1～6	48.90	1.60～2.60	0.10～0.20	N12°W	4.88～5.05	南方へ緩やかに下降	縄文・弥生土器、土師器・須恵器、御経器、石丁	現地でさき本に分岐	第6図

第２表　２区自然河川一覧表

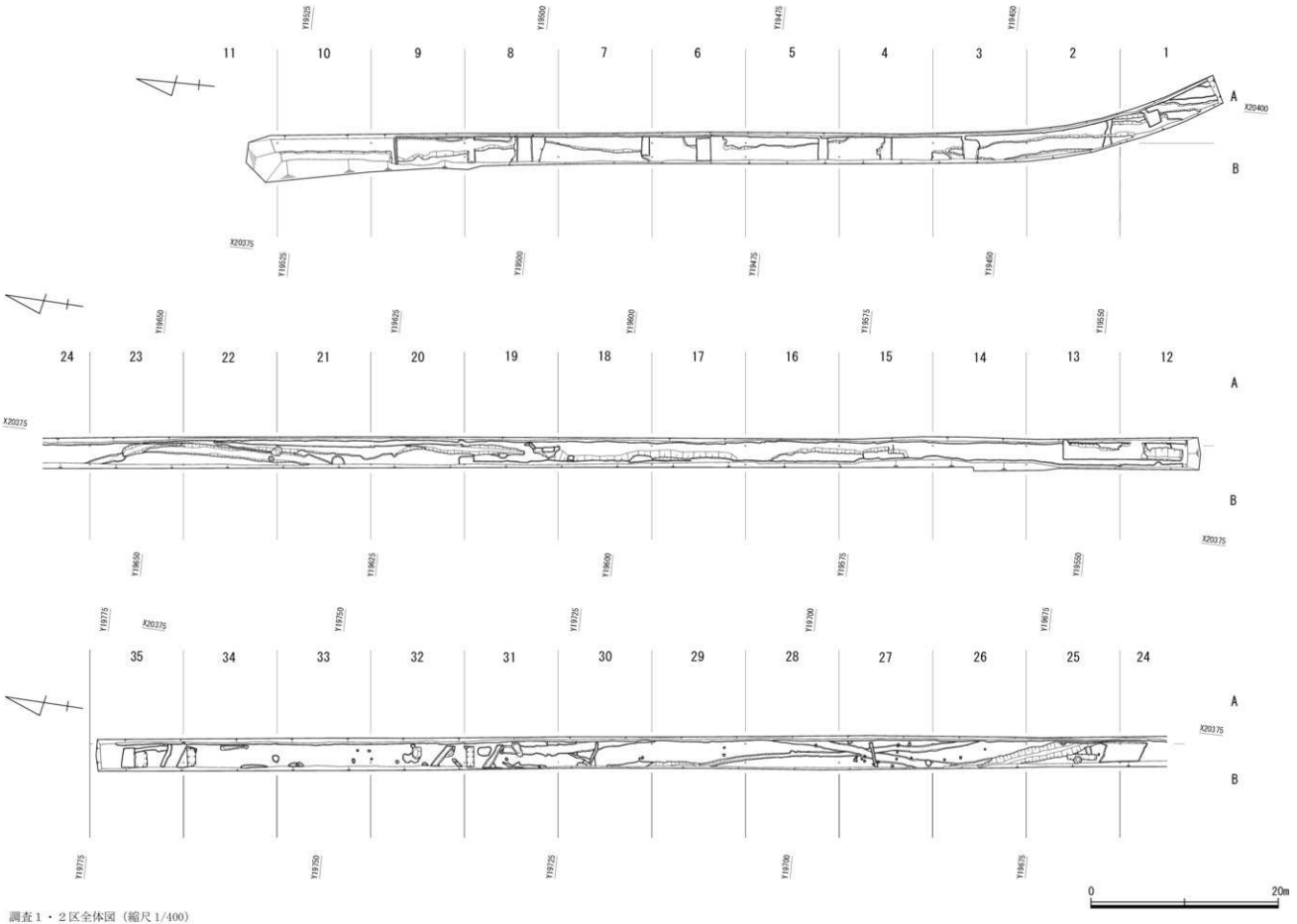
遺構名	地区	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	底面の標高(m)	底面の傾斜	出土遺物	備考	掲図番号
SR1	A・B12～22	103.14	1.86以上	0.05～0.43	N-S	4.70～5.01	南方へ緩やかに下降	縄文土器、須恵器、石器など	SD7・SD10に後行、SD7・SD11に重複	第7図
SR2	A・B24・25	3.34	3.90	0.17以上	N72°W	4.78	ほぼ平坦		SD13と重複か	第9図

第３表　２区溝一覧表

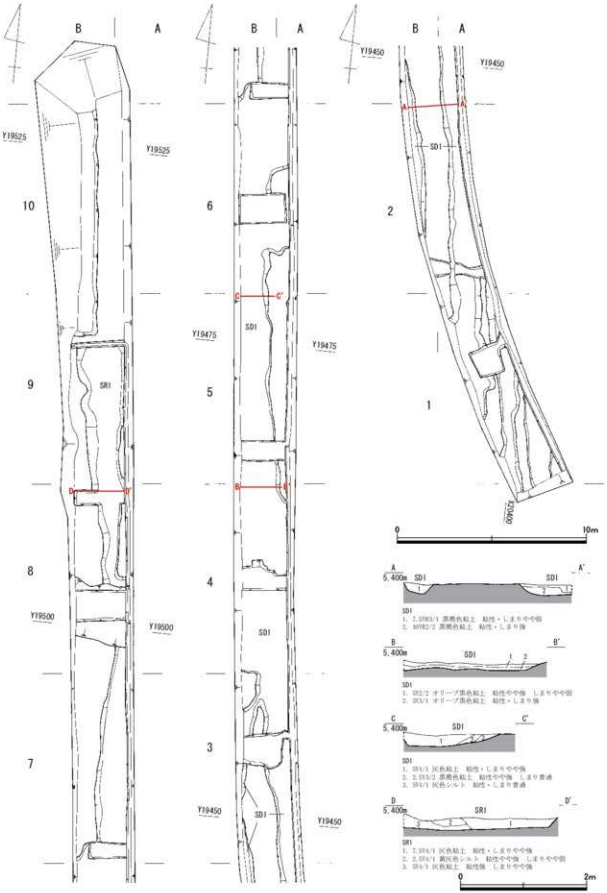
遺構名	地区	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	底面の標高(m)	底面の傾斜	出土遺物	備考	掲図番号
SD1	A・B19・20	12.78	1.14	0.28～0.34	N7°W	4.77～4.89	ほぼ平坦	弥生土器	SR1に先行、SR1に重複	第7図
SD2	A・B21～23	20.18	0.92～1.20	0.15～0.24	N-S	4.96～5.05	ほぼ平坦	縄文土器、土師器、須恵器	SR1・SK10に先行、SP11に隣接、SD13・SK6に重複	第7図
SD3	A・B25・26	13.82	1.40～1.72	0.42～0.47	N20°W	4.71～4.77	ほぼ平坦		SR1に先行、SR2・SR11に重複	第8図
SD4	A・B26～28	23.64	0.76～0.98	0.05～0.20	N7°E～N11°W	5.08～5.14	ほぼ平坦		SD5・6に後行、SD5・SP11に重複	第8図
SD5	A・B26～29	27.40	0.43～0.76	0.09～0.17	N6°～12°W	5.08～5.21	北方へ緩やかに下降		SD4に先行、SD6・7に重複	第8図
SD6	A・B27	2.74	0.30～0.38	0.39	N72°E	4.95	ほぼ平坦		SD4に先行、SD5に重複	第8・9図
SD7	A・B29・30	16.00	0.86以上	0.06～0.56	N1°W	4.66～5.17	南方へ下降	縄文土器	SD1に重複	第9図
SD8	A・B29～31	18.98	0.84～1.22	0.05～0.13	N7°W	5.03～5.18	北方へ緩やかに下降		SK5に後行、SD9～11に重複、途中で途切れる	第9図
SD9	A・B30	2.46	0.18～0.46	0.12	N18°E	5.11～5.16	北方へ緩やかに下降		SD8・10に重複	第9図
SD10	A・B30	2.40	0.34～0.38	0.19～0.27	N72°W	4.99～5.06	西方へ緩やかに下降		SD8・9に重複、途中で屈曲	第9図
SD11	A・B31	3.18	0.48～0.70	0.26	N62°W	4.83	ほぼ平坦		SD8に重複	第9図
SD12	A・B32	1.30	0.56	0.14	N37°E	5.02	ほぼ平坦	緑色凝灰岩（原石）		第8・9図
SD13	A・B32	3.14	0.66	0.31～0.39	N55°W	4.79～4.86	西方へ緩やかに下降			第9図
SD14	A・B31	4.74	0.18～0.34以上	0.03～0.09	N89°E	5.07～5.14	南方へ緩やかに下降			第9図
SD15	A・B34	2.86	0.36以上	0.20	不明	4.64	不明		全体形不明	第8・9図
SD16	A・B36	3.00	0.48以上	0.30	不明	4.74	不明		全体形不明	第8・9図
SD17	A・B34・35	2.68	1.18	0.27	N72°W	4.66	ほぼ平坦			第9図
SD18	A・B35	2.58	0.54	0.13	N70°W	4.82	ほぼ平坦		SD19と重複	第8・9図
SD19	A・B35	3.56	0.38～0.70	0.16	N9°W	4.82～4.86	ほぼ平坦		SD18・20と重複	第8・9図
SD20	A・B35	2.16	1.26～1.48	0.11	E-W	4.82～4.89	ほぼ平坦		SD19と重複	第9図
SD21	A・B23・24	16.54	0.76～1.08	0.10～0.26	N22°W	4.83～5.04	南方へ緩やかに下降		SD2と重複	第7図
SD22	B25	0.92	0.52～0.62	0.05	N72°E	5.07	ほぼ平坦		SD1と重複	第8・9図

第４表　２区土壌十坑・ピット一覧表

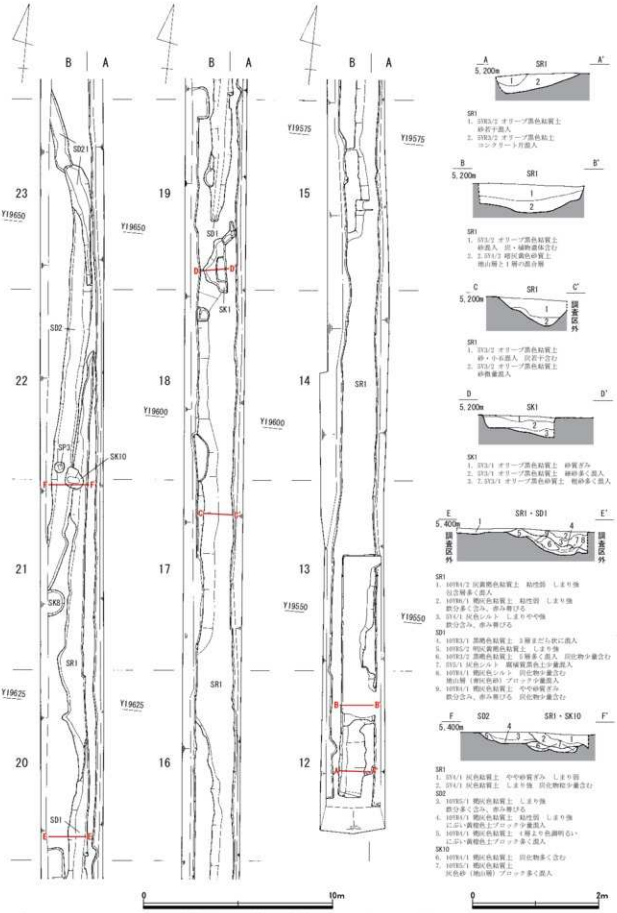
遺構名	地区	平面形	平面規模 長径×短径(m)	深さ(m)	方位(長軸)	出土遺物	備考	掲図番号
SK2	B25	円形	0.90×0.76	0.88	N2°W			第8・10図
SK3	B31	不明	0.71（長径）	0.36	N5°W			第8・10図
SK4	B32	楕円形	1.22×1.00	0.64	N84°E			第8・10図
SK5	B31	楕円形	1.72以上×0.86	0.38	N63°E		SD6に先行	第8・10図
SK6	B33	楕円形	0.92（長径）	0.36	N4°W	弥生土器		第8・10図
SK7	B25	円形	0.88（長径）	0.76	N5°W		SD5に後行	第8・10図
SK8	B21	円形	1.44（長径）	0.18	N16°E		SD2に重複か	第7・10図
SP1	B27	円形	0.73×0.60	0.42	N68°E		SD4に先行か	第8・10図
SP3	B22	不整円形	0.60×0.54	0.46	N32°E		SD21に先行、深さは遺構確認面から計測	第7・10図



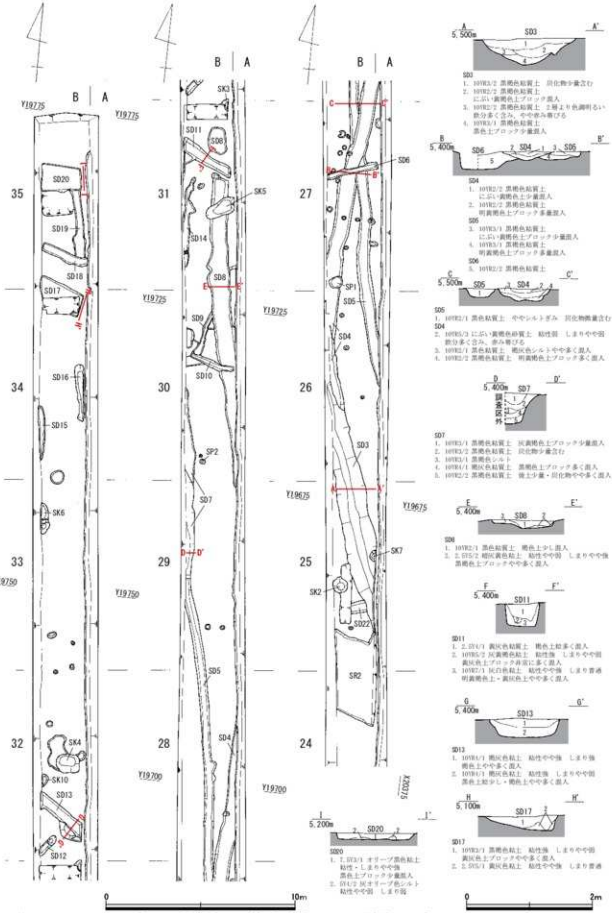
第５図　調査１・２区全体図（縮尺 1/400）



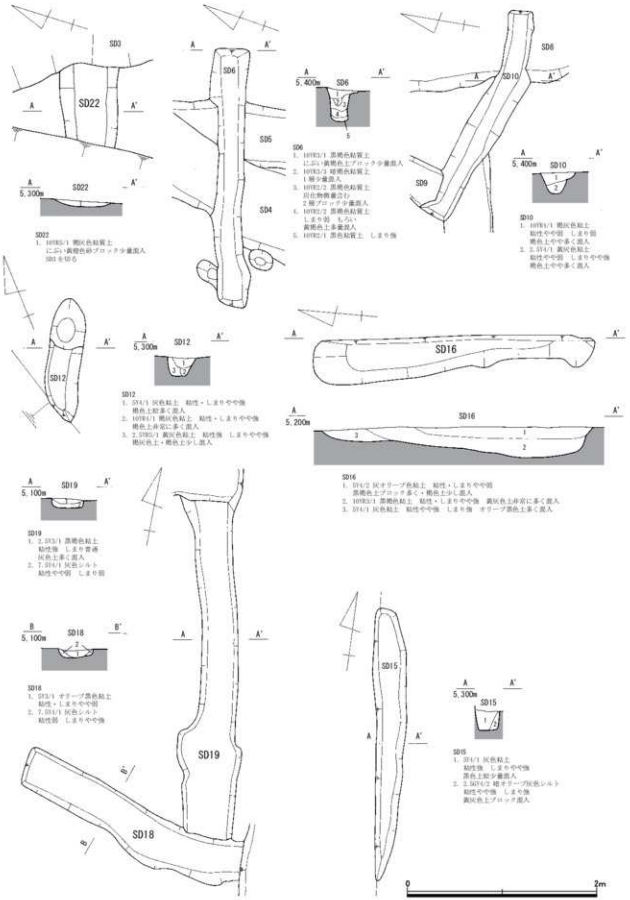
第６図　１区 遺構実測図（縮尺　遺構：1/200、断面：1/60）



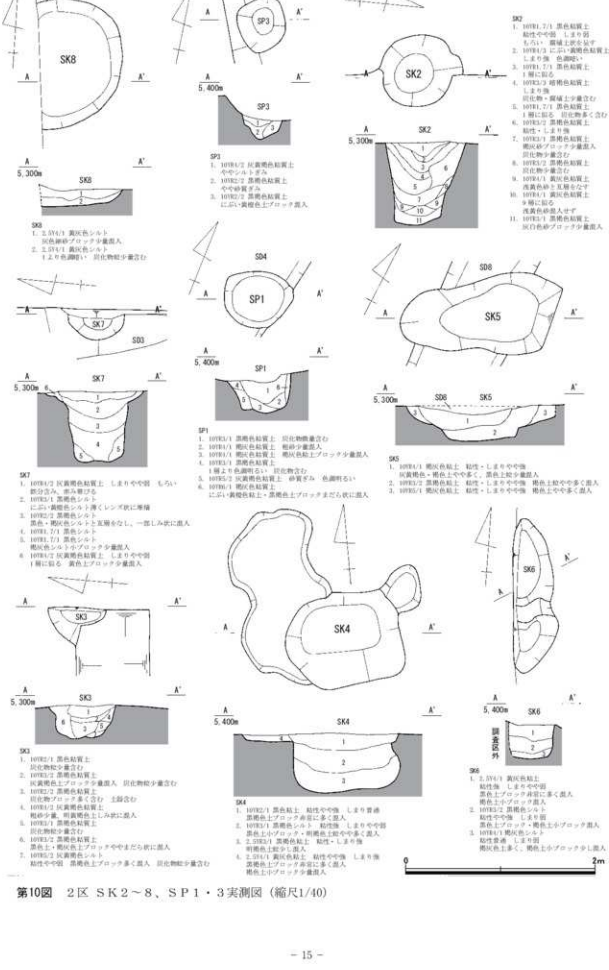
第７図　２区 12～23グリッド遺構実測図（縮尺　遺構：1/200、断面：1/60）



第８図　２区 24～35グリッド遺構実測図（縮尺　遺構：1/200、断面：1/60）



第９図　２区 ＳＤ６・10・12・15・16・18・19・22実測図（縮尺1/40）



SK8
1. 2.5Y6/1 黄灰色シルト
灰色砂砂ブロック少量混入
2. 2.5Y4/1 黄灰色シルト
1より色調暗い　炭化物粒少量含む

SP3
1. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土
ややシルトボラ
2. 10YR2/2 黒褐色粘質土
やや砂質ボラ
3. 10YR2/2 黒褐色粘質土
に近い黒褐色土ブロック混入

SK2
1. 10YR1.7/1 黒色粘質土
粘性やや強　しまり弱
もろい・微礫土炭化粒少
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
しまり強　色調暗い
3. 10YR1.7/1 黒色粘質土
1層に似る
4. 10YR3/3 暗褐色粘質土
しまり強
炭化物・微礫土少量含む
5. 10YR1.7/1 黒色粘質土
1層に似る　炭化物多く含む
6. 10YR3/2 黒褐色粘質土
粘性・しまり強
7. 10YR3/1 黒褐色粘質土
褐灰色ブロック少量混入
炭化物少量含む
8. 10YR3/2 黒褐色粘質土
炭化物少量含む
9. 10YR4/1 褐灰色粘質土
炭黄色砂と互層をなす
10. 10YR4/1 褐灰色粘質土
9層に似る
炭黄色砂混入やず
11. 10YR2/1 黒褐色粘質土
灰白色砂ブロック少量混入

SK7
1. 10YR4/3 灰黄褐色粘質土　しまりやや弱　もろい
鉄分含み、赤み帯びる
2. 10YR2/1 黒褐色シルト
に近い黒褐色シルト薄くレンズ状に堆積
3. 10YR2/2 黒褐色シルト
黒色・褐灰色シルトと互層をなし、一部しみ状に混入
4. 10YR1.7/1 黒色シルト
5. 10YR1.7/1 黒色シルト
褐灰色シルトやブロック少量混入
6. 10YR3/2 灰黄褐色粘質土　しまりやや弱
1層に似る　黄色土ブロック少量混入

SP1
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土　炭化物微量含む
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土　粗砂少量混入
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土　褐灰色粘土ブロック少量混入
4. 10YR4/1 黒褐色粘質土
1層より色調明るい　炭化物含む
5. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土　砂質ボラ　色調明るい
6. 10YR6/1 褐灰色粘質土
に近い黒褐色土・黒褐色土ブロックまざる状に混入

SK5
1. 10YR4/1 褐灰色粘土　粘性・しまりやや強
灰黄褐色・褐色土やや多く、黒色土少量混入
2. 10YR3/2 黒褐色粘土　粘性・しまりやや強　褐色土粒やや多く混入
3. 10YR5/1 褐灰色粘土　粘性・しまりやや強　褐色土やや多く混入

SK3
1. 10YR2/1 黒色粘質土
炭化物粒少量含む
2. 10YR3/3 黒褐色粘質土
灰黄褐色ブロック少量混入　炭化物粒少量含む
3. 10YR2/2 黒褐色粘質土
炭化物ブロック多く含む　土器含む
4. 10YR4/3 灰黄褐色粘質土
粒砂少量、明黄褐色土ムラに混入
5. 10YR3/1 黒褐色粘質土
炭化物粒少量含む
6. 10YR2/2 黒褐色粘質土
黒色土・褐灰色土ブロックややまだら状に混入
7. 10YR3/2 灰黄褐色シルト
粘性やや弱　黒褐色土ブロック多く混入　炭化物粒少量含む

SK4
1. 10YR2/1 黒色粘土　粘性やや強　しまり普通
黒褐色土ブロック赤茶に多く混入
2. 10YR3/1 黒褐色シルト　粘性強　しまりやや弱
黒色土小ブロック・明褐色土粒やや多く混入
3. 2.5YR3/1 黒褐色粘土　粘性・しまり強
明褐色土粒少し混入
4. 2.5YR4/1 黄灰色粘土　粘性やや強　しまり強
黒褐色土ブロック赤茶に多く混入
褐色土小ブロック少量混入

SK6
1. 2.5Y6/1 黄灰色粘土
粘性強　しまりやや弱
黒色土ブロック赤茶に多く混入
褐色土小ブロック混入
2. 10YR3/2 黒褐色シルト
粘性やや強　しまり弱
黒色土ブロック・褐色土小ブロック混入
3. 10YR4/1 褐灰色シルト
粘性普通　しまり弱
褐灰色土多く、褐色土小ブロックや少し混入

0　2m

第10図　2区 SK2～8、SP1・3実測図（縮尺1/40）

第３節　遺物（図版第３・４、第11～14図、第５・６表）

１　縄文土器

破片を主体とする。出土量は弥生土器より多い。所属時期は晩期後葉に限定される。以下、沈線や刺突などによる文様の有無により、有文土器と無文土器に大別して説明する。

１）有文土器（第11図１・７・11）

１は浅鉢である。口縁部が「フ」字状に内屈し、幅広となる口縁端部に沈線を施す。口縁側端部に眼鏡状隆帯文を配し、その直下に４条の浅い平行沈線文を配す。沈線施文後にナデを施す。７は浅鉢の体部上半である。４条の平行沈線文を確認できる。ナデ後に沈線を施文する。11は深鉢または壺の胴部上半である。上下２連の押し引き状の刺突文を３帯配す。各刺突文帯は間隔を広くもつ。刺突文は断面が「Σ」字状となり、各刺突文帯においても上側の刺突文が深くなる。丁寧な縦位ナデ後に刺突文を施文する。内面にはナデを施すが、上方を中心に絞り痕が残る。

２）無文土器（第11図２・４・８～10・12～17・20・21）

器種には深鉢（10・12～17）、壺（２・８）、浅鉢（９）があり、破片としての底部（４・20・21）がある。15は壺の可能性もある。外面調整には縦位条痕（２・４・10・13・15～17・20・21）、ケズリ状の強い横位ナデ（12）、縦位ナデ（14）がある。口縁部の最終調整として横位ナデを施し、無文部とする例（２・10・12・13）がある。底部（４・20・21）はいずれも胴部から底側部まで縦位条痕を施文後、底側部に指による横位ナデを施す。

２は口縁部が直立し、肩部が大きく張り出す器形を呈す。口縁端部には指による浅い押圧を施す。内面には粗いナデを施す。４は底面に粗いナデを施すが、単位性のない敷物痕である径２～５㎜の小孔が多数残る。内面には板状工具によるナデを施す。８は口縁部が直立する。肥厚して短く外屈する突帯状の口唇部には指による押圧を施す。口唇部下方にはナデを施し、無文部となる。９は口唇部が肥厚して短く外屈する。幅広の口縁端部には強いナデを施し、中央部が凹線状となる。内外面ともに丁寧なナデを施す。10は口縁端部に指による刻みを施す。12は口縁端部にナデによる面をもつ。胴部の横位ナデは幅２㎝以上の板状工具による。口縁部の横位ナデは縦位条痕例（２・10・13）と共通する。13は口縁部が内傾し、口唇部が折り返し状に短く肥厚する。口縁端部には面をもたない。14は縦位ナデを口唇部まで施す。20・21は底面に丁寧なナデを施す。４と同様な敷物痕である小孔はほぼ残らない。

これらの縄文土器の編年的位置は、おおむね12が大洞Ｃ２式後半～同Ａ式前半に、その他が大洞Ａ式に併行すると考える。有文土器のうち、１・２は工字文系土器であり、11は長竹式の範疇に収まる土器である。無文土器のうち、２・４・８・10・13～17・20・21は在地系の糞置式に比定される。12は口縁端部や胴部の調整などから、糞置式より古い様相を示す。

２　弥生土器

摩滅が顕著な個体が多い。時期は中期と後期が認められる。以下、時期ごとに説明する。

１）中期の土器（第11図３・５・18・19）

３は櫛描文系の広口壺である。口縁部が強く外湾し、上方を向く口縁内面には直線文原体刺突による羽状文を施し、口縁端面にはヘラ描斜格子文を施す。頸部にはヘラ描斜行刻目文と櫛描直線文を２帯配す。直線文は６、７条である。頸部上方には太く浅い縦位ハケを施す。内面には粗いナデを施す。５は甕である。口縁部が「く」字状に外反する。口縁端部にはナデを施すが、明瞭な面をもたない。外面には縦位ハケを施すが、口頸部では顕著ではなく、ハケ後に横位ナデを施し、指頭圧痕も残る。内面は口

第11図　縄文土器・弥生土器実測図（1～6：縮尺1/4、その他：縮尺1/3）

縁部には短く連続する横位ハケ、胴部上半には斜位ハケ、胴部下半には縦位ハケを施す。胴部下半にはハケ後に間隔をあけて縦位ナデを施す。18は櫛描文系の壺頸部である。５条の直線文２帯とヘラ状工具による抉り状の三角形文を１帯配す。直線文２帯は密接する。直線文は浅く、条線間の断面は丸みをもつ。外面には丁寧な斜位ナデ、内面には太く浅いハケ後丁寧なナデを施す。19は条痕文系の壺胴部上半である。櫛状工具による縦位短沈線文の直下に幅広のヘラ描弧線文を施す。外面には斜位条痕を施す。施文順序は条痕後に縦位短沈線と弧線文となる。内面にはナデを施す。

２）後期の土器（第11図６）

６は甕である。端部がすぼまり、やや外傾する有段口縁部に擬凹線を施す。月影式に相当する。胴部の外面にはハケ、内面にはケズリを施す。

第５表　縄文土器・弥生土器出土地点一覧表

挿図№	出土地点	挿図№	出土地点	挿図№	出土地点	挿図№	出土地点
第11図１	A7･8	SD１	第11図７	A7	SD１	第11図13	B23	SD２	第11図19	A31	遺構面精査
第11図２	A7	SD１	第11図８	A22	SR１	第11図14	A22	SR１	第11図20	A7	SD１
第11図３	A32	SK10	第11図９	A7	SD１	第11図15	B22	SD２	第11図21	A7	SD１
第11図４	B23	SD２	第11図10	B23	SD２	第11図16	A22	SR１			
第11図５	A33	SK６	第11図11	B29	SD７	第11図17	A3	SD１(トレンチ)			
第11図６	A7	SD１	第11図12	B23	SD２	第11図18	A7	SD７			

３　古代～近世の土器

古代の土器には土師器と須恵器が、中・近世の土器には土師質皿や陶磁器類がある。いずれも磨滅が顕著なものが多く、破片も数点接合した程度である。所属時期については、土師器と須恵器が主に８世紀後半から９世紀代で、９世紀後半から10世紀にかかる時期まで下るもの（第12図13）もある。陶器類は13～16世紀代、土師質皿と磁器は18世紀代まで下るものと考える。

１）須恵器（第12図１～16）

１～４は口径が13～14cm前後の無台坏（坏A）、６～８は有台坏（坏B）である。９・10は有台坏で、口径は不明ながら６～８より明らかに大きくなるものと考える。５はかえりの無い蓋である。11～13は口径が15～16cm前後の皿で、口縁への立ち上がりが大きく開く。14は口縁が小さく屈曲する鉢、15はおそらく瓶類の底部である。16はその径から短頸壺の胴部下半と推測する。

２）土師器（第12図17～21）

17・18は長胴甕の口縁部である。17は小さく開いた口縁部の端部を強いナデによって受口状にする、本遺跡周辺の古代遺跡からも多く出土する典型的なロクロ成形品である。18は厚手の口縁部の端部が内面に肥厚するもので、形状や調整から非ロクロ成形品と推測する。19は小型甕の平底である。20は甑の把手部分である。21は胴部片であるが、色調などから17と同一個体の可能性が高い。

３）土師質皿（第13図１・２）

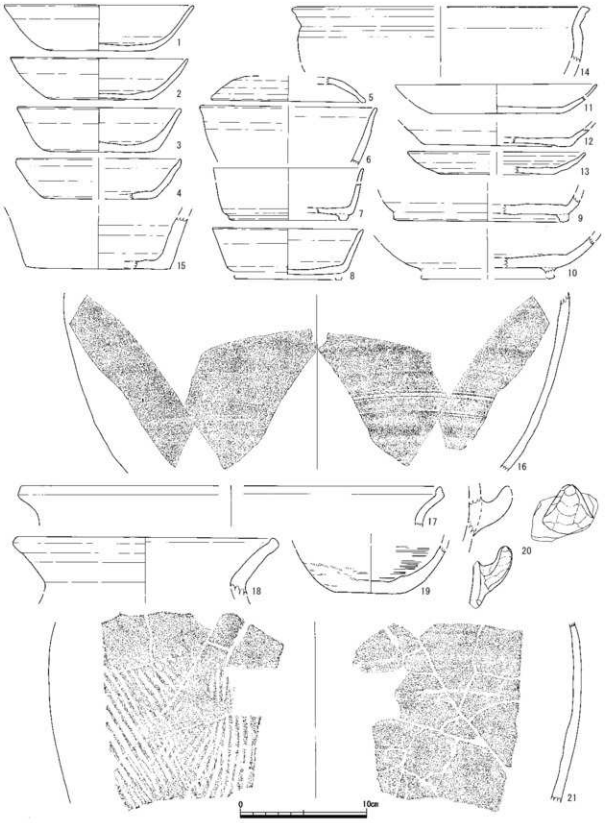
１はナデ成形で口縁に煤の付着が残る。２は底部に糸切の痕跡が残り、非常に丁寧な作りで焼成も良好である。

４）陶器（第13図３～５・７～９）

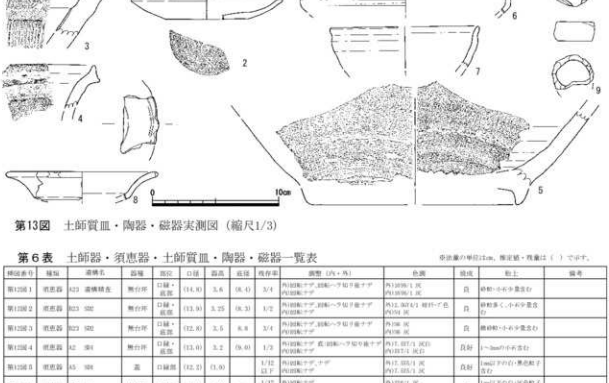
３～５は越前焼で、３は摺鉢の口縁部、４は甕の口縁部、５は捏鉢の底部である。７は天目茶碗の口縁部、８は輪花口縁の皿である。所属時期は４・５が13・14世紀代、３・７・８が15・16世紀代とそれぞれ考える。９は土製円盤で、胎土の特徴から中世越前焼の甕胴部片を利用したものと考える。

５）磁器（第13図６）

６は口縁が小さく立ち上がる磁器の鉢で、胴部の最大径まで釉薬がかかる。



第12図　土師器・須恵器実測図（縮尺1/3）



第13図　土師質皿・陶器・磁器実測図（縮尺1/3）

第6表　土師器・須恵器・土師質皿・陶器・磁器一覧表

※法量の単位はcm，推定値・残存は（ ）で示す。

挿図番号	種類	遺構名	器種	指定	口径	器高	底径	残存率	調整（内・外）	色調	焼成	胎土	備考
第12図1	須恵器	423 遺構精査	無台坏	口縁・底部	(14.8)	3.6	(8.4)	3/4	内:回転ヘラ切，回転ヘラ切子葉ナデ 内:回転ナデ	内:10YR/1 灰 外:10YR/1 灰	良	砂粒・小石少量含む	
第12図2	須恵器	423 SB2	無台坏	口縁・底部	(13.3)	3.25	(8.3)	1/2	内:回転ヘラ切，回転ヘラ切子葉ナデ 外:回転ナデ	内:7.5YR/1 褐灰~灰色 外:5Y 灰	良	砂粒多く，小石少量含む	
第12図3	須恵器	423 SB2	無台坏	口縁・底部	(12.8)	3.5	8.8	3/4	内:回転ヘラ切，回転ヘラ切子葉ナデ 外:回転ナデ	内:5Y 灰 外:5Y 灰	良	微砂粒・小石少量含む	
第12図4	須恵器	42 SK4	無台坏	口縁・底部	(13.0)	3.2	(9.6)	1/3	内:回転ナデ 底:回転ヘラ切り後ナデ 外:回転ナデ	内:7.5Y/1 灰白 外:7.5Y/1 灰白	良	1~3mm の小石含む	
第12図5	須恵器	45 SB4	蓋	口縁部	(22.3)	(3.8)		1/12 以下	内:回転ヘラ切，ナデ 外:回転ナデ	内:7.5Y/1 灰 外:7.5Y/1 灰	良好	1mm以下の白・黒色粒子含む	
第12図6	須恵器	417 SB1	有台坏	口縁部	(14.0)	(3.9)	—	1/12 以下	内:回転ヘラ切 外:回転ナデ	内:10YR/4 灰 外:10YR/2 黒灰白	良	1mm以下の白・灰色粒子含む	
第12図7	須恵器	423 SB2	有台坏	底部	—	(3.0)	10.3	1/10	内:回転ヘラ切 外:回転ナデ	内:5Y 7/1 灰白 外:5.7Y 7/6 灰	良	1~3mm の白・灰色小石含む	
第12図8	須恵器	423 SB2	有台坏	口縁・底部	(11.8)	3.6	9.5	1/2	内:回転ヘラ切，回転ヘラ切子 外:回転ナデ	内:5Y 3/1 黒色 外:5Y 灰	良	微砂粒・砂粒・小石少量含む	
第12図9	須恵器	415 遺構精査	有台坏	底部	—	(2.2)	(13.8)	1/4 以下	内:回転ヘラ切，回転ヘラ，ナデ 外:回転ヘラ切	内:7.5Y/1 褐灰 外:7.5Y/1 灰白~黒	やや不良	微細な白色粒子~3mm程の小白色小石含む	
第12図10	須恵器	42 SK4	有台坏	底部	—	(3.0)		1/12	内:回転ヘラ切 外:回転ナデ	内:7.5Y 灰 外:5Y 灰	良好	微細な白色粒子~3mm大の小白色石	内，表面内に付着物
第12図11	須恵器	44 SB4（トレンチ）	蓋	底部	—	(1.35)	10.3	1/4	内:回転ヘラ切，回転ヘラ切子蓋ナデ 外:回転ナデ蓋ナデ	内:5YR/1 灰白 外:5Y/1 灰白	良	微密 1mm程の白色粒子含む	
第12図12	須恵器	423 遺構精査	蓋	底部	—	(1.55)	(11.6)	1/8	内:回転ナデ，回転ヘラ切り後ナデ 外:回転ヘラ切	内:10YR/4 褐灰 外:7.5YR/1 灰	不良	1mm以下の白・灰色粒子含む	土師質
第12図13	須恵器	423 SB2	蓋	底部	(23.0)	(4.4)	—	1/12 以下	内:回転ナデ，回転ヘラ切り後ナデ 外:回転ナデ	内:7.5Y/1 オリーブ黒 外:10YR/1 灰	良好	微細な灰・白色粒子含む	内:白黒輪
第12図14	須恵器	42 SB4（トレンチ）	鉢	底部	—	(4.3)	11.3	1/12 以下	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:10YR/3 黒褐 外:10YR/2.7/1 灰白	良好	微密 3mm程の黒・白色砂粒含む	
第12図15	須恵器	424 SB3	鉢	底部	—	(4.3)	11.3	1/12 以下	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:10YR/3 黒褐 外:10YR/2.7/1 灰白	良好	微密 3mm程の黒・白色砂粒含む	
第12図16	須恵器	424 SB3	双耳壺	胴部	—	(14.1)	—	胴部 1/10	内:ケズリ後ナデ 外:ナデ	内:7.5YR/4 にぶい橙 外:7.5YR/4 にぶい橙	やや不良	微細粒多く，砂粒少量含む	焼付蓋
第12図17	土師器	411 表採	長胴甕	口縁部	(23.0)	(3.1)	—	口縁 1/12 以下	内:ナデ調整 外:ナデ調整	内:7.5YR/4 にぶい橙 外:7.5YR/4 にぶい橙	やや不良	微細粒多く含む	焼付蓋，同図口と同一個体か
第12図18	土師器	44 SB4（トレンチ）	長胴甕	口縁部	(21.0)	(4.3)	—	1/12 以下	内:横ナデ 外:指頭	内:10YR/3 浅黄橙 外:10YR/3 浅黄橙	やや良	1mm以下の白・灰褐粒，3mm大の小石含む	
第12図19	土師器	423 SB2	小型甕	底部	—	(3.8)	5.5	3/4	内:ナデ痕 外:カキ目	内:10YR/3 灰白 外:7.5YR/4 浅黄橙	やや不良	微細な白色粒子~3mm程の白色小石含む	
第12図20	土師器	424 遺構精査	甑	把手部	—	(4.4)	—	把手みみ	内:指頭圧痕，ナデ 外:横方向のハケ	内:7.5YR/1 灰白 外:7.5YR/1 灰白	やや不良	1mm以下の白石粒子含む	
第12図21	土師器	411 表採	甕	胴部	—	(14.2)	—	胴部 1/10	内:ナデ調整 外:ナデ調整	内:7.5YR/4 にぶい橙 外:7.5YR 灰	良	微細粒~砂粒少量含む	同図17と同一個体か
第13図1	土師質皿	417 排水溝	皿	—	(11.0)	1.5	—	全体の 1/3	内:整理痕のちナデ 外:整理痕のちナデ	内:10YR/3 にぶい黄橙 外:10YR/7/3 にぶい黄橙	良		焼石無痕
第13図2	土師質皿	424 排水溝	皿	—	(12.0)	1.6	6.0	全体の 1/3	内:回転ナデ，赤彩を底 外:回転ナデ	内:7.5YR/4 にぶい橙 外:7.5YR/4 にぶい橙	良		焼付に赤彩痕
第13図3	瀬戸焼	表採	碗類	口縁部	—	(4.3)	—	1/12 以下	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:10YR/8 橙 外:10YR/4 にぶい橙	良好	1mm以下の白・灰色粒子含む	
第13図4	瀬戸焼	425 遺構精査	碗	口縁部	—	(3.5)	—	1/12 以下	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:10YR/1 灰 外:2.5YR/3 暗赤	良好	微細な白色粒子~3mm程の黒色小石含む	内・外に黒輪
第13図5	瀬戸焼	表採	灯油	底部	—	(5.9)	—	1/12 以下	内:ケズリ，ナデ 外:ナデ	内:7.5YR/4 にぶい橙 外:7.5YR/4 にぶい橙	良好	1mm以下の白・灰色粒子，3mm程の白色小石含む	
第13図6	磁器	45 SB4	鉢	口縁部	(36.0)	(5.7)	—	1/12 以下	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:7.5Y/1 灰白 外:7.5Y/1 灰白	良好	微密	内面，外に黒輪のトニウム現付着
第13図7	天目茶碗	416 SB1	碗	口縁部	(11.8)	(3.3)	—	1/12 以下	内:回転ナデ 外:回転ナデ	内:7.5Y/1 黒 外:7.5Y/1 黒	良好	微密	黒輪
第13図8	陶器	47 SB4（トレンチ）	皿	口縁部	(12.0)	(2.2)	—	1/12 以下	内:口:輪花	内:10YR/2 オリーブ黒 外:10YR/2 オリーブ黒	良好	微密	
第13図9	磁器類	44 SB4（トレンチ）	土製行灯	—	5.5（底部）	3.3（胴部）	1.5（受け）		内:不明 外:不明	内:10YR/3 にぶい黄橙 外:10YR/4 にぶい橙	良好	微密 3mm以下の白・黒色粒子含む	燈油皿台の転用か

４　石器

石器は石鏃１点のほか、緑色凝灰岩の原石と剥片が各１点出土したのみである。

石鏃（第14図１）

Ｂ22グリッド、２区ＳＲ１より出土した。完形品で長さ5.630cm、幅1.730cm、厚さ0.615cm、重さ5.300gをそれぞれ測る。石材は安山岩で、石質は緻密である。いわゆる無茎鏃で、側縁部を中心に密な両面調整が施される。基部にはほとんど調整が施されず、自然面が残るほか、一部の剥離面は摩耗して線状痕が認められる。先端部も完全には尖り出されておらず、加工途中のような印象も受ける。

５　金属製品

金属製品には包丁、釘、鉄鏃があるが、すべて１区ＳＤ１の近・現代攪乱部より中・近世陶磁器などとともに出土しており、近世以降の遺物と推測する。本項では遺存状態が良好な包丁１点を図示する。

包丁（第14図２）

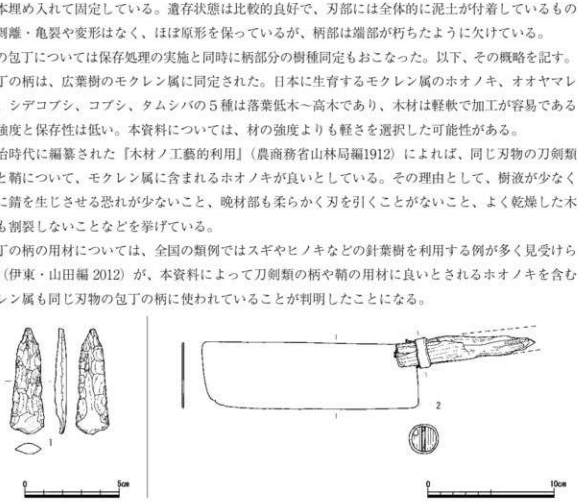
Ａ５グリッド、１区ＳＤ１の近・現代攪乱部より出土した。いわゆる薬刀で、刃部と柄部が遺存する。残存全長26.20cm、残存身長（みたけ）17.10cm、身幅（みはば）5.20cm、身背幅（みせいはば）0.15cm、残存柄部長11.08cm、柄部径2.30cmをそれぞれ測る。鉄製の刃部を芯持丸木の柄に差し込み、金属製の口輪を嵌めてから、若干の隙間に鉄釘を計３本埋め入れて固定している。遺存状態は比較的良好で、刃部には全体的に泥土が付着しているものの、剥離・亀裂や変形はなく、ほぼ原形を保っているが、柄部は端部が朽ちたように欠けている。

この包丁については保存処理の実施と同時に柄部分の樹種同定もおこなった。以下、その概略を記す。

包丁の柄は、広葉樹のモクレン属に同定された。日本に生育するモクレン属のホオノキ、オオヤマレンゲ、シデコブシ、コブシ、タムシバの５種は落葉低木～高木であり、木材は軽軟で加工が容易であるが、強度と保存性は低い。本資料については、材の強度よりも軽さを選択した可能性がある。

明治時代に編纂された『木材ノ工藝的利用』（農商務省山林局編1912）によれば、同じ刃物の刀剣類の柄と鞘について、モクレン属に含まれるホオノキが良いとしている。その理由として、樹液が少なく刀身に錆を生じさせる恐れが少ないこと、晩材部も柔らかく刃を引くことがないこと、よく乾燥した木材でも割裂しないことなどを挙げている。

包丁の柄の用材については、全国の類例ではスギやヒノキなどの針葉樹を利用する例が多く見受けられる（伊東・山田編 2012）が、本資料によって刀剣類の柄や鞘の用材に良いとされるホオノキを含むモクレン属も同じ刃物の包丁の柄に使われていることが判明したことになる。



第14図　石鏃・包丁実測図（縮尺：石鏃1/2、包丁1/3）

参考文献
伊東隆夫・山田昌久 編『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社 2012年
農商務省山林局 編『木材ノ工藝的利用』大日本山林會 1912年

第４章　まとめ

今回の調査成果から、本遺跡は基本的には縄文、弥生、古代、中・近世の各時代に展開した集落跡と理解できる。遺構は１・２区を通じて自然河川や溝が主体であり、これは過去の調査成果[1]ともある程度は一致するが、井戸やそれに類するような大型の土坑は数少なく、掘立柱建物や柱列などの構造物も抽出し得なかった。したがって、今回の調査区は基本的には集落の居住域から外れた縁辺部と考える。

遺物については、土器のほとんどが磨滅・劣化した状態にあることや、自然河川や溝が遺構の主体を占めること、近・現代以降の攪乱や削平を被っていることなどを考慮すれば、その多くは周辺他所から後世に流入した可能性が高い。加えて出土量自体が非常に少ないため、遺構遺物の出土事例は実にわずかであるが、それらについて遺構の所属時期を検討する。

縄文時代については、晩期の土器が比較的多く得られたものの、すべて破片資料でしかも自然河川や溝からの散発的な出土であり、明確に遺構に伴うような状況は確認できなかった。弥生時代については、中期の土器が出土した２区ＳＫ６・10と、玉作り関連遺物である緑色凝灰岩の原石が出土した２区ＳＫ12については弥生時代の土坑と見なして良いだろう。古代については、土師器や須恵器（第12図２・３・７・８・14・19）がまとまって出土した２区ＳＤ２が古代の溝と判断できる。中・近世については、１・２両区のＳＲ１が近世～近現代の同一の自然河川と推測するのみである。

一方、遺構の内容や分布状況に注目すると、２区ＳＲ２以南が自然河川と比較的大きめの溝が数本程度なのに対し、以北は大小様々な溝と土坑・ピットが多数集中しているのが大きな特徴である。これに前述した各時代の様相などを考え合わせ、各地区の性格を考察する。

まず、ＳＲ２以南については、自然河川やそれに関連する用排水路としての溝が分布するものと推測する。複数時期の溝が重複している可能性が高いが、それ以外の遺構がほとんど認められないことから、その地勢や性質は各時代を通じてほとんど変わることがなかったものと考える。

対して、ＳＲ２以北は弥生時代の土坑が複数認められることや古代以降の遺物が全く出土していないことから、基本的には弥生中・後期に限定して営まれた集落の一部と考える。遺跡の周辺地形を見ると、南北方向を主とする旧河川の流れに沿って自然堤防など小規模な微高地が点々と分布していたと推測される（第３図）が、東西方向を向くＳＲ２はそのような微高地を区切る形で流れていたことになる。ＳＲ２出土遺物が全くないので確実な時期は不明だが、おそらくは弥生時代末以降の河川の氾濫によりＳＲ２以北の土地は埋没し、それ以降は居住地としては機能しなかったものと考える。

結論として、ＳＲ２以南と以北はともに集落の縁辺部ではあるが、溝が主体であるという以外に共通点がほとんど見出せない。両区の違いは単に時期的問題だけではなく、それらが付随する集落本体が異なっており、その違いを反映している可能性も考慮すべきであろう。

註

1　平成21年（2009）の調査では弥生時代と古代の溝、中世の井戸などを検出した（野路編2014）。平成22年（2010）の調査では平安時代の溝のほか、中近世の井戸を多数検出した（青木編2013）。いずれの調査区も今回の調査区の近隣に位置する。

参考文献

青木隆佳 編『大関東遺跡・上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第139集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2013年
野路昌嗣 編『上蔵垣内遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第151集 同 2014年

写　真　図　版

(1)　1区南半部全景（南より）

(2)　1区北半部全景（南より）

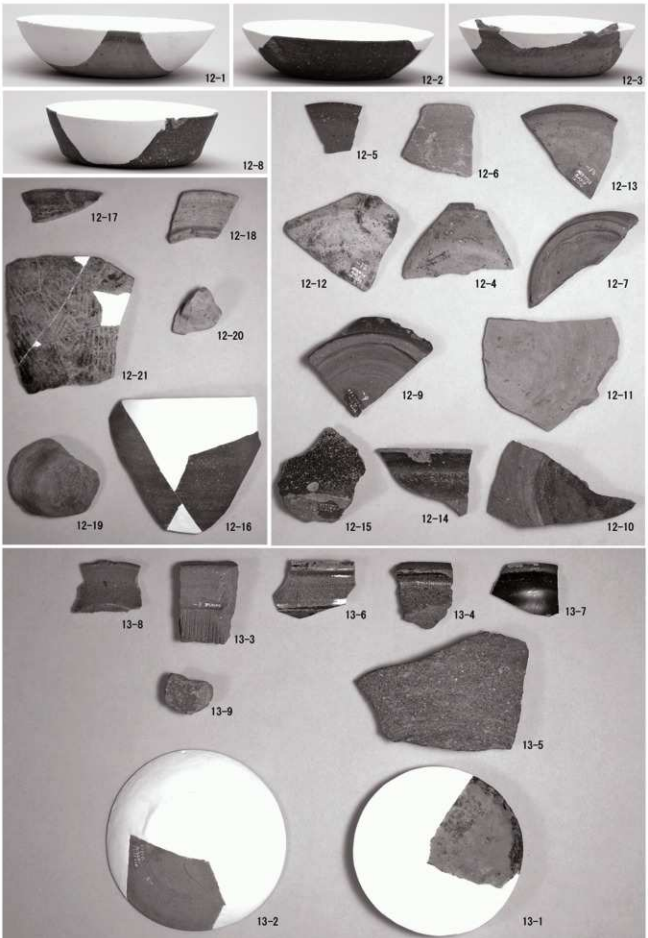
(3)　2区12･13グリッド全景（北より）

(4)　2区14～19グリッド全景（北より）

(1) 2区20～27グリッド全景（北より）

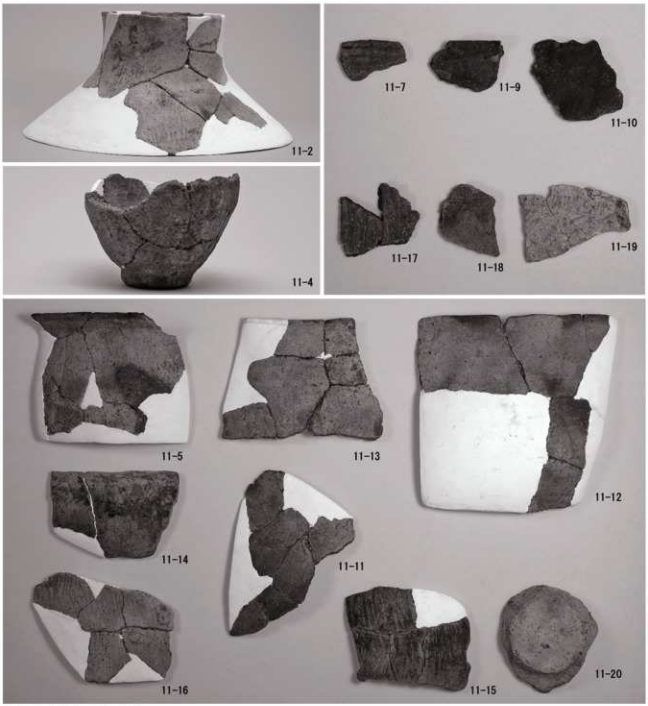
(2) 2区28～35グリッド全景（北より）

(3) 3区全景（北より）



土師器・須恵器・土師質皿・陶器・磁器

図版第四　遺物（土器・石器・金属製品）



(1) 縄文土器・弥生土器

(2) 石鏃

(3) 包丁

報 告 書 抄 録

ふ り が な	かみくらがいちいせき
書　　名	上蔵垣内遺跡
副 書 名	県営かんがい排水事業　東江地区に伴う調査
巻　　次	
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第164集
編 著 者 名	中森敏晴　赤澤徳明　山本孝一
編 集 機 関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒910-2152　福井県福井市安波賀町4-10　　Tel：0776-41-3644
発行年月日	西暦2017年3月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 °　′ ″	東 経 °　′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かみくらがいちいせき 上蔵垣内遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 坂井市 さかいちょう 坂井町 ごほん 五本・ かみぜき 上関	18210	11040	36° 10′ 40″	136° 13′ 35″	20131101 ～ 20131227	1,330 ㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上蔵垣内遺跡	集落	縄文晩期 弥生中・後期 古代 中世 近世	自然河川 溝 土坑・ピット	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 中・近世陶磁器 土師質皿（近世） 包丁（近世以降）	自然河川と溝が主体。

要　約

上蔵垣内遺跡は縄文・弥生・古代・中世・近世の各時代に展開した集落跡である。遺構は自然河川とそれに関連すると見られる用排水路としての溝が主体であるが、居住遺構がほとんど検出されなかったことから、基本的には集落の縁辺部であったと考える。

調査区は遺構の内容や様相などから、自然河川を境界として北半部と南半部とに大きく分けられる。南半部は複数時期の自然河川や溝が重複していると見られ、それ以外の遺構がほとんどないことから、その地勢は各時代を通じてほとんど変わることがなかったと考える。対して、北半部は弥生時代に限定して営まれた集落の一部で、おそらくは河川の氾濫により埋没し、それ以降居住地としては機能しなかったと考える。この北半部と南半部の様相の違いは、単なる時期的問題だけではなく、付随する集落そのものの違いである可能性もある。

福井県埋蔵文化財調査報告　第 164 集

上 蔵 垣 内 遺 跡

－ 県営かんがい・排水事業 東江地区に伴う調査 －

平成29年３月１日　印刷
平成29年３月22日　発行

発行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒910－2152　福井市安波賀町4－10
印刷　足羽印刷株式会社
〒918－8231　福井市問屋町3丁目212